



ティン・ホイッスルの本

初心者の為のアイリッシュ伝統音楽案内

楽器編～その1～

——制作発行：Studio “G”

～ はじめに ～

アイルランドの伝統音楽で使われる楽器の中でも、ティン・ホイッスル（別名 ペニー・ホイッスル）は簡単に音が出て演奏もしやすく、安価なので、初心者にはうってつけの楽器です。しかも、アイリッシュで演奏される曲はほとんど吹けるし、装飾音のつけ方などの基本的なテクニックも他の楽器でできるものはほとんどできる優れものです。

でもその奥は深く、どこでどんな装飾音を入れるのか、また入れないのか、バリエーションの付け方、息の使い方によって変わる音色や息つぎの仕方など、やればやるほど深みにはまるのは他のもっと複雑で高価な楽器に引けを取りません。他の楽器を主に演奏している人でも、最初にティン・ホイッスルを練習していた人は多いようです。

この小冊子はティン・ホイッスルを全く知らない人を対象に、この楽器がどんな物なのかをQ&A形式で紹介したものです。教則本ではないので楽譜などは載っていませんが、これを読んで「自分でも吹いてみたいな」と思う人が一人でも増えてくれればと思います。自分で演奏できるようになると、新たな世界が拓けてくるのです。



Q. ホイッスルって？ 笛？



ってよく聞かれますが、その通りです。体育の時間に使うようなプラスチック製の「笛」と音の出るしくみは同じで、それに金属製の管のつ

いた縦笛だと思ってもらえばいいでしょう。

一見、小学校の時に使ったりコーダーの親戚のように見えますが、穴は6つしか開いていません。

それで、「ドレミファソラシド」の8つの音をどうやって出すのかというと、6つの穴を全部押さえると「ド」、一番下の穴を空けると「レ」、と順番に開けていって、全部はなすと「シ」になります。実は、その上の「ド」は、もう一度全部押さえて、ちょっと強く吹くと出るのです。（一番上の穴だけ開ける方法もあります。）同様に強く吹くと、それぞれ1オクターブ上の音が出るのです。

※指の押さえ方と音程の関係を楽譜と共に巻末に載せてあります。

ただ、「強く吹くと高い音が出る」と書きましたが、強く吹きすぎると音が割れたりひっくり返ったりして、なかなかきれいな音が出ないので、最初はその加減が難しいかもしれません。

では、どうすればいいかというと、息の「量」を増やすのではなく、「圧力」というか「勢い」を強くするといいようです。たとえば言うと、水道のホースの口を絞ると、「量」は変わらないのに「勢い」よく水が出ますが、そんな感じでしょうか。

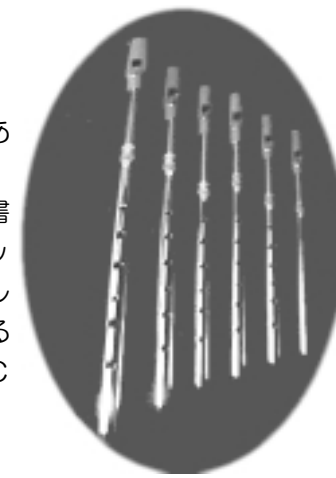
半音は、指をちょっとななめに浮かせて半開きにすると出ますが、アイリッシュでは、使わなくても演奏可能な曲がほとんどです。



Q. 長さの違うホイッスルを見たんだけど...

そうなんです。いろんな長さのホイッスルがあるんです。で、長いほど低い音が出ます。

先程、穴を全部押さえると「ド」が出ると書きましたが、それは「C管」と呼ばれるホイッスルの話です。「ドレミファソラシド」をアルファベットで表すと「C D E F G A B C」になるので、「C管」というのは、一番低い音が「C（ド）」で始まる笛だということです。



ティン・ホイッスルには、低い方から「Bフラット」「C」「D」「Eフラット」「F」「G」

短くなるほど高い音が出ます。

と6種類の管がありますが、アイリッシュのセッションでは、基本的に「D管」一本で充分です。（つまり、一番低い音が「D（レ）」から始まるのですが、相対的には「ドレミファソラシド」と聞こえます。）

ただし、歌もののバックで吹く時には、その人のキーにあわせた笛を選ぶ必要があります。また、ソロで吹く時は、その音色で管を選ぶ人もあるようです。「Bフラット」や「C」なんかはちょっと低くて渋い感じになり、「Eフラット」や「F」だと、コロコロかわいい感じになります。（もちろん吹き方にもよりますが...）「G」はあまりに小さく押さえにくいので、実際にはあまり使われないようです。

Q. 「D管」だと、「D」のキーしか吹けないの？

いえいえ、いろいろ吹けるのです。まず「G」のキーが代表です。「D管」で上の穴を3つ押さえた音が「G（ソ）」になるのですが、それを「ド」だと思って音階を始めるのです。途中で、上から2つ目と3つ目の穴を押えないといけないうところが出てきます。実際に音をだして、「ドレミ・・・」と聞こえるようにやってみてください。

あと、「Em」「Bm」や「A」「Am」の曲も吹けるようです。

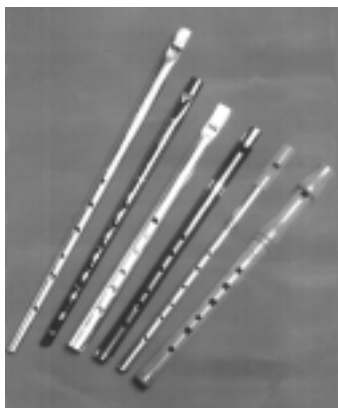
ところで、この「m」というのは「マイナー（短調）」の略で、ちょっとさびしげな感じに聞こえます。何もついていないのは「メジャー（長調）」です。

Q. 何調が見分ける方法はあるの？

理論的にはいろいろあるのですが、感覚的には、その曲が「終わった感じのする音」が、その曲の基準の音であることが多いようです。全部押さえて終わった感じがすれば「D」、5つなら「Em」、3つなら「G」って感じでしょうか。

ただ、これはあくまで大雑把で感覚的な方法なので、違う場合もあるでしょう。ご参考まで。（実際には「長調」「短調」以外の調もあるようですが、こういう「調」に関することは、知っているとな便利なこともあるということ、知らなくても演奏はできますから、ご心配なく。）

Q. いろんな色や形のホイッスルを見るんだけど..



はい。吹き口のプラスチックの部分が青や赤のものをよく見ると思います。あと、緑とか黒とか。金属の管の部分も、銀色とか、くすんだ金色とか黒とか... 全体がプラスチックでできているものもありますし、リコーダーかと思ふ、ちょっと高価な木製のものもあります。管の形も、円筒と円錐の2種類があり、それぞれ材質や形によって音色や吹きやすさが違います。

「青+銀色」と「赤+金色」のものが一番流通している英国製の「ジェネレーション」というホイッスルでしょう。銀色（ニッケル）の方がややはっきりした音で、金色（ブラス）の方がやや甘い感じかな？「ウォルトンズ」や「ファードグ」の吹き口は、アイルランド製ということもあって、やはり緑色です。（そういえば、青と赤はユニオンジャック・カラー...）

「ウォルトンズ（元 Soodlum's）」には「メロー・D」というやや太い管があって、その名の通り、メローな音色です。アメリカ製でプラスチックでできている「スザート」の笛は独自の音がします。大きな音が出るので、セッションで使う人が多いのですが、息の使い方が難しいので、初心者向けではありません。（それに、ちょっと高いし...）

あと、先に行くほど細くなる「クラーク」のホイッスルは老舗です。甘い音がします。吹き口に木が埋め込んであるので、それが湿ってくる

と音に影響がでるのですが、最近プラスチックの吹き口のついた“スウィートーン”という笛を出しています。色もいろいろあって、かわいく、音色も“すういと”です。

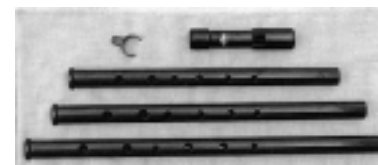
基本的に、ホイッスルは大量生産なので、品質には差があります。同じメーカーの同じ種類の笛でも、そのコンディションは均一ではありません。できれば試し吹きして買うか、何本か買うという手もあります。でも、最初はそんな差は気にしなくてもいいと思いますが、いろんな種類の笛を吹き比べるのは興味深いですね。

* インターネットに接続できる人は次のサイトを訪ねてみてください。

<http://www.chiffandfipple.com/inexp.html>

英語のページですが、いろいろなホイッスルの写真が見れます。

これは、“Thumbrest”（親指かけ）。
「転落防止ストッパー」としても重宝します。



スザート（D / C / Bフラット管セット）

Q. どこで売ってるの？

最近では、大きな楽器店においてある場合もありますが、やはりその数は限られているようです。

関西では、京都の「十字屋（三条店）」には「ジェネレーション」の青と赤を全種類おいています。その近くの寺町京極の民族楽器店「コイズミ」にもありますし、一乗寺の喫茶店「ウッドノート」でも入手可能です。四条烏丸（京都）のアイリッシュ・パブ「field」や、難波（大阪）の「クリアースポット」では、吉田文夫さんの通販店「グレンミュージック」の商品を扱っていて、ホイッスルの他に、CDやビデオなどもおいているようです。（「ウッドノート」や「field」ではセッションも楽しめます。）あと、インターネットが使える人は、「アーリー・ミュージック・プロジェクト」のホームページをのぞいてみてください。梅田や心斎橋（大阪）、渋谷や御茶ノ水（東京）で見たという報告もあるので、多分いろんなところに出回っていることでしょう。値段は1000円ちょいかな。本場のプロのミュージシャンでも、それと同じホイッスルを吹いているのです。 ※巻末に参考所在地をあげておきますのでご覧ください。

Q. ティン・ホイッスルのオバケみたいなを見たのですが...

多分それは、ロー・ホイッスルですね。一番よく見るのが、“ロー・D” といって、ティン・ホイッスルの「D 管」の1 オクターブ下の音が出ます。ということは、倍の長さがあるということです。見た目は、ティン・ホイッスルをそのまま大きくしたようなものから、金属パイプに穴を開けたようなものまで、いろいろです。

ティン・ホイッスルと比べて、大量の息が必要で、穴も大きくその間隔も広いので、押さえるのが大変です。具体的には指先ではなく、第1 関節と第2 関節の間くらいで押さえるのがいいようです。凄くいい響きで、特にゆっくりした曲を吹くには最適です。



Davy Spillane

リバーダンス（ダブリン公演のビデオ）のオープニングでも、ディビー・スピランの素晴らしい演奏が楽しめます。ロー・ホイッスルもティン・ホイッスルと同様、いろいろなキーがあるようです。（低い「A」のホイッスルもありますが、基本的には“ロー・G” からが、ロー・ホイッスルというのだそうです。）



Q. チューニングはできるの？

はい&いいえ。

「クラーク」の笛のように、吹き口と管が一体化しているものはダメですが、吹き口を上下させることで、若干のピッチの調節は可能です。セッションではアコーディオンなどのチューニングできない楽器に音を合わせることがよくあります。出荷時には、しっかりと取り付けられているのですが、熱いお湯に吹き口を数秒つけると、のりが溶けて、移動が可能になります。でも、これはあくまで裏技です。壊れても責任はもてませんので、あしからず。「スザート」のは、最初から“チューナブル”なものと、そうでない一体型があります。

息の量や勢い、それから管の温度でも若干の変化があるので、自分の音とまわりの音に耳をすましましょう。

Q. どうやって練習すればいいの？

簡単に音が出るので、自分の知ってる曲を吹いてみてもいいかと思いますが、アイルランドの伝統音楽を演奏する楽器として考えるのであれば、やはりそれなりの練習が必要だと思います。

教則本&テープ・CDや教則ビデオもいろいろ出ていますが、やはり人から習うのがいいでしょう。伝統音楽というのは、基本的に人から人に伝わっていくものだと思います。とはいえ、日本では簡単に教えてくれる人を見つけることはできないかとは思いますが、探せばけっこういるものです。

東京では守安功さんや安井マリさんの教室もあるし、名古屋でもティン・ホイッスル教室の案内があります。関西なら、岸本タローさんや金子鉄心さんなどが定期的に教えてくださいます。「ウッドノート」のマスターも親切にアドバイスしてくれることでしょう。

～～関西のホイッスル・レッスンについて～～

●岸本タローさん

（「却来花」「音の旅人」「ザ・ひょうたんフィルハーモニック」など）

場所；伊丹アイフォニックホール

日時；第1 & 3 木曜日 19:00 ~ 21:00

連絡先；suga23@mwd.biglobe.ne.jp（横田さん）

関連サイト；<http://ototabi.i.am/>、<http://www1.kcn.ne.jp/~omori/Hyophil/>

●金子鉄心さん（「Exile」など、元「おかげ様ブラザーズ」）

場所；京都のアイリッシュ・パブ「field」

日時；月2 回火曜日 19:30 ~ 21:00、月1 回土曜日 18:00 ~ 19:30

案内；<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/minpochi/kaneko.htm>

関連サイト；<http://www2s.biglobe.ne.jp/~ongakuya/exile/>

●山口智さんの教室は現在休止中。個人レッスン（フィドルも）の

お問い合わせは、yamaguch@kcn.ne.jp まで。

「早く曲が吹けるようになりたい」という気持ちは分かりますが、吹き始める前に、曲を覚えて口ずさめるようになるほど聴き込む、ということが大切です。CDからだけでなく、実際のセッションやライブに足

を運ぶことも重要です。最近では日本でも、けっこう内容の濃いセッションやライブがあります。

とはいえ、やはりそんな機会の少ない人にオススメの教則本・ビデオは、Geraldine Cotter（ジェラルディン・コッター）の教則本（&別売CD）、あるいはL.E.McCulloughの教則ビデオです。2つとも全くの初心者対象です。ジェラルディンの模範演奏は、選曲も渋いし、やさしい感じの演奏で、聴くだけでも充分楽しめます。



また、ある程度吹けるようになってきて、セッションでよくやる曲をもっと覚えたいという人には、同じくMcCulloughの「121 Favorite Irish Session Tunes」という、CD4枚付きの楽譜集が便利です。

模範演奏はゆっくり目と普通のスピードと2回ずつ収録されているし、片チャンネルにホイッスル、片チャンネルに伴奏楽器と分けてあって、ホイッスルだけでなく、ギターなどの伴奏楽器の人の練習用にも使えて便利です。楽譜にはもちろんコードもついています。

ただ、やはり人から直接教えてもらった曲は愛着があったり、思い入れがあっていいですね。その曲にまつわる話を聞けたり、その曲を覚えた時のことを含めて、あせらず、のんびり、じっくりとその曲とつきあっていければ理想的です。（レパートリーはなかなか増えませんが、．．）

それから、あまりアイルランドの音楽をよく聴いていない段階で、楽譜だけから曲を覚えるのはオススメできません。メロディーは同じでも、リズムのとり方やアクセントの付け方、装飾音の入れ方次第で、全く別物になります。

あと、楽譜や教則本やCDで覚えた曲と、実際にセッションでやっている曲が微妙に違うことはよくあることですし、同名異曲や同曲異名もよくあるので、あまり神経質にならない方がいいでしょう。